

目的 住生活様式は地域の風土や伝統文化、家族観を反映して様々な態様をなし、時代と共に変容してきている。しかし都市化や近代化は生活の均質化、画一化をもたらし、地域固有の住生活様式は喪失する傾向にある。そこで本研究は、急速に都市化が進展している台湾の都市の集合住宅を中心に住生活様式を調査し、住まいに投影されている家族の住まい方及びそれらを規定する諸要因について日本と比較・分析していくことを目的とする。

方法 台湾の台北市、高雄市において訪問留置法によるアンケート調査と、住まい方については間取り採取、聞き取り調査を実施。調査時期：昭和62年5月中旬～6月中旬。有効回収数：質問紙調査法では489票、間取り採取数26件。日本のデータは昭和57年～61年までに小澤らが首都圏において実施した調査結果を用いた。

結果 ①台湾では三世代世帯の家族形態が日本より多く、集合住宅においても子夫婦と同居している世帯が多い。②日本では未だ夫支配一妻服従の夫婦関係が多いが、台湾では学歴、年齢に関係なく夫婦間の平等意識は強い。それが、子供のしつけにもそれが反映されている。③台湾では集合住宅においても伝統的な合院形式の間取りが継承されており、出入り口は客厅（リビング）に直結し、靴脱ぎの空間はない。バルコニーや共同廊下がその空間である場合が多い。なお客厅には対外的な性格が残存しており、祭壇が設置されている場合が多い。④台湾ではプライバシー意識が強く、夫婦の寝室はバスユニット付で確立されている。⑤伝統的に台湾ではイス坐の起居様式であるが、生活水準の上昇、中とりに対応して、待客のための日本間を設ける住まいがみられる。